



先日、みやぎ中央新聞編集長 水谷もりひと氏の講演を聞きました。みやぎ中央新聞社の発行している日本講演新聞は、中学校の道德の教科書にも掲載されているとのこと、講演の中で、その社説が紹介されました。

『(前文省略) 哲学者の内田樹氏は、著書「下流志向」の中で「労働の本質は雪かきにある」と言っている。

雪かきをする人は、雪かきをしているところを多くの人から目撃されることはない。人々が仕事や学校に行く時には既に雪かきは終わっている。そのきれいに雪かきされた道を、みんな当たり前のように歩いている。中には、「誰が雪かきをしてくれたんだろう？」と思いながら歩いている人もいるかもしれないが、誰がしたか分からないので、その感謝の気持ちが言葉になることはない。しかし、誰かがそれをしなかったら、凍りついた雪に足を滑らせて転んだり、ケガをしたりする。つまり、雪かきは誰かを喜ばすためをするのではなく、その道を通る人たちがいつものように普通に歩いて行けるようにやっているのである。誰も見ていないし、誰からも称賛されることはない。それでも、その作業を誰かがやらなければならない。そういう人がいることで、実は社会はうまく回っているのだ。そして何事もなく、平常通りに人々が仕事や学校に行ってしまったのを見届けた時、雪かきした人はものすごい充実感を覚えるのだろう。もっと言うと、世の中の仕事というものはそういうものかもしれない。いや、仕事だけではない。消防団や民生委員、自治会役員、夜回りなど、何十年もやっている人たちがいる。社会からの無言の称賛を感じる感性を持っていないと、「こんなことやってられるか！」という気持ちにもなるだろう。内田氏は同書の中で、足元にある大切なものに気づかず、遠くにある「幸せの青い鳥」を探して旅することと、「雪かき」を対比させている。「自己利益の最大化」を求めて「青い鳥」を捜しに行く生き方も、もちろん尊重されるべきだが、そういう人たちは「雪かき作業」に対する敬意が欠けているのではないかと。』 (株)宮崎中央新聞社 日本講演新聞より引用

私は(進路指導部主任 棚内)、「自己利益の最大化」を求めて、「青い鳥」を探しに行く生き方が、「雪かき作業」に対する敬意が欠けているとは思いますが、生徒それぞれが、「(それぞれの) 幸せの青い鳥」を探しながら、「自分が誰かの役に立っている」ことを感じ、充実感を得ることができる進路先を選択してほしいと強く願っています。



令和7年度 中学部事業所見学

7月12日、13日に事業所見学を行いました。ABCの3グループに分かれてそれぞれの見学先で、利用者の方々の様子や、施設の様子を見てきました。実際に施設で活動をしてきたグループもありました。その後、感想をまとめて、事業所見学報告会も行いました。見学に行ってみて分かったこと、これから自分で頑張りたいことなどを発表することができました。

Aグループ 見学先：社会福祉法人健誠会 多機能型事業所 楽多（つがる市）



パンを作っている工房を見学しました。見学の最後には、施設の方に質問をしました。「卒業に向けて、今、学校で頑張ればいいことは何ですか？」と質問をすることができました。

Bグループ 見学先：社会福祉法人共生会 多機能型事業所 飛翔食房（鶴田町）

社会福祉法人鶴田町社会福祉協議会 鶴花塾（鶴田町）



メンマの加工の体験と、花の鉢植え作業を体験しました。メンマの加工では、衛生面に気をつけて、ネットキャップや手袋をつけての体験でした。

Cグループ 見学先：有限会社修清 夢の森ラッキー（五所川原市）

社会福祉法人拓心会 ワークセンターのれそれ（五所川原市）



ビニールハウスでサンチュの栽培を見学しました。見学した後は、サンチュを一枚ずつ重ねて、袋に入れる準備をしました。お店に出荷するので、丁寧に扱いました。